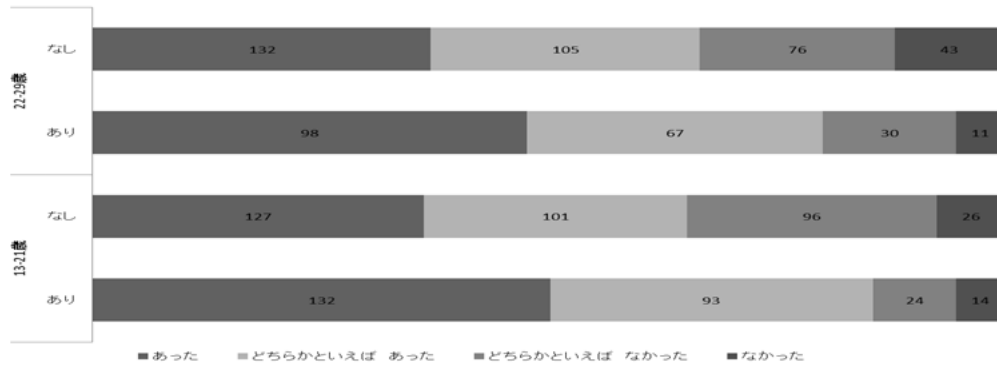
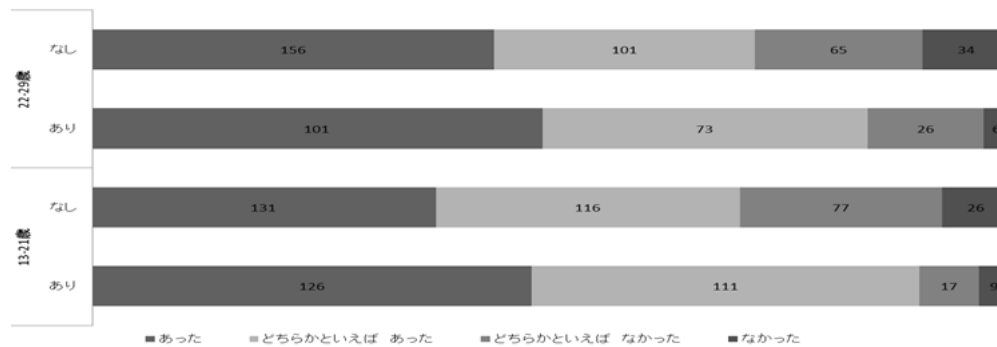


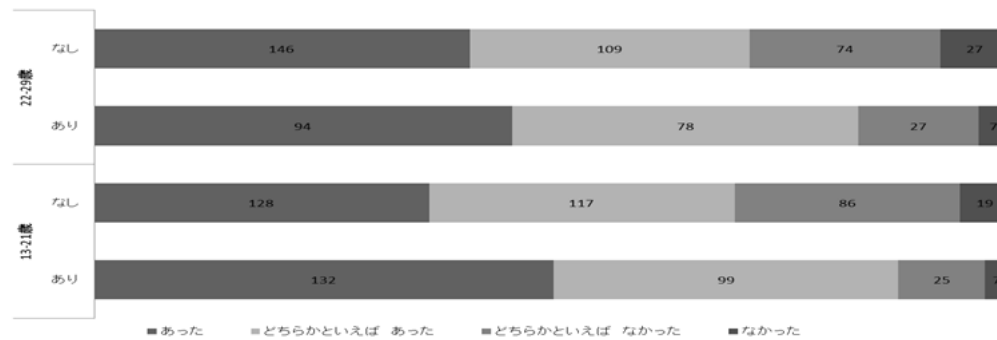
友人関係の心配事×悲しいと感じたこと



友人関係の心配事×憂鬱だと感じたこと



友人関係の心配事×つまらない、やる気が出ないと感じたこと

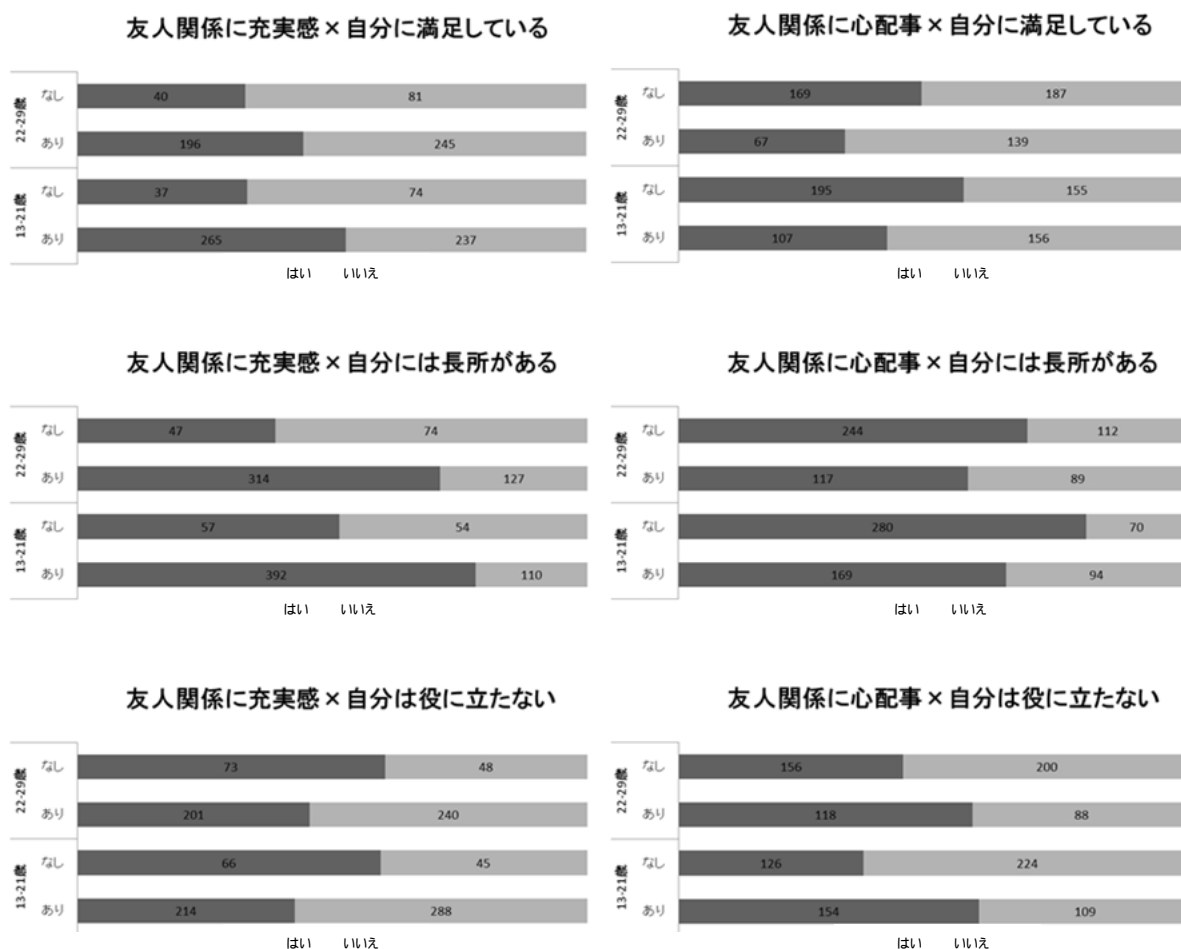


2. 友人関係における自由度

メンタルヘルスの観点から眺めた場合、本調査の設問のなかで大きく関連していると思われるのは、おそらく「自分についてのイメージ」を尋ねた項目だろう。設問はそれぞれ4段階評価で聞いているが、ここで取り上げるものについてはいずれも両端の回答数が非常に少なく、中心部に回答が偏っているため、2段階評価に再カテゴライズして、メンタルヘルスに関わる設問との関連性を調べてみる。すると、「自分は役に立たないと強く感じる」が、「悲しいと感じたこと」「憂鬱だと感じたこと」「つまらない、やる気が出ないと感じたこと」のいずれとも1%水準で有意な正の関連を示し、「自分に満足している」「自分には長所がある」が、3つの設問のいずれとも負の関連を示していることが分かる。

そこで、これらの設問と、友人関係の充実感および心配事をそれぞれクロスさせてみる

と、前者と「自分に満足」「自分に長所」には1%水準で有意な正の関連が、「役に立たない」には負の関連が見られる。また後者とは、それぞれ逆に負の関連と正の関連が見られる。ちなみにファイ係数をとって相関の度合いを調べてみると、いずれの場合も青年後期より前期のほうが相関度は高い。ここから、友人関係の不安として表われてくるその心配事は、彼らの自己イメージの低さと関連しており、しかもその傾向は若年層に強いことが分かる。



しかし、本調査の項目のなかで自己イメージにやはり大きく関わっていると思われる「自分についての誇り」の設問群と、友人関係の心配事との関連を調べてみると、いずれの設問との間にも有意な関連を見出すことはできない。「自分についての誇り」として本調査で尋ねているのは、「明るさ」「やさしさ」「忍耐力」「慎み深さ」「賢さ」「正義感」「決断力」といった自己内在的な属性である。これらの属性のいずれとも有意な関連が見出せないということは、彼らの友人関係に関わる自己肯定感が、おそらくこのような自己内在的な属性ではなく、他者との関係性のなかで確認されうるような属性にあるものと推測される。

他者との関係性を規定する能力としてよくあげられるのは、いわゆるコミュニケーション能力だろう。とりわけ近年は、アサーション（自己表現法）の重要性が指摘されるなかで、その注目度が高まっている。本調査のなかにも、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」と思うか否かを尋ねた設問がある。ところが、友人関係の心配事との関連を調べてみると、一応は有意な負の関連が見られるものの、その相関度は非常に低い。その能力が不要というわけでないが、おそらくもっと重要なのは、暗黙の裡に場の空気をお

互いに読みあって、意見の衝突が起きないように相手の意向をさりげなく察する能力なのだろう。少なくとも友人関係に関しては、そういった能力が彼らの自己肯定感を支える大きな要因になっているものと推察される。

では、なぜそのような能力が強く求められるのだろうか。その理由を本調査からじかに知ることはできない。しかし、青年前期と後期を比較した場合、まだ職に就いていない者が多い前者のほうが社会的な制約も少なく、したがって友人関係の自由度も高いとすれば、これは友人関係を規定する制度的な枠組みの強弱と関わっていると推察できるだろう。実際のところ、フェイス項目にある「仲の良い友人の数」と年齢層の間には1%水準で有意な差があり、青年前期のほうが後期より友人数は多い傾向にある。

そうしてみると、後期より前期のほうが友人関係の心配事と不安感の関連が強く、また自己肯定感との関連も強いという事実は、前期のほうがそれだけ友人関係の自由度が高いことの裏返しといえるのではないだろうか。社会的な制約が少ない分だけ、そのリスクも増すからである。だからこそ、アサーションのように自己を主張しうる能力ではなく、むしろ衝突を避けて空気を読みあう能力が重視され、その有無が不安感や自己肯定感を左右しているのではないだろうか。そもそも友人関係を心配事とする者それ自身が、前期のほうが後期よりも5%水準の有意差で多いことから、それはうかがい知ることができるだろう。

ところで、青年前期と後期のように2つの年齢集団で有意な差が見受けられる場合、その背景要因として考えられるのは、ライフステージの進行にともなう関係の変化だけではない。それに加えて時代の推移にともなう変化と考えることもできる。年齢が上昇するにつれて心性が変わってきたのだとすれば、それは加齢効果といえるが、時代が推移するにつれて心性が変わってきたのだとすれば、それは世代効果といえる。すなわち、2つの年齢集団に差が見られるのは、各々の世代が育ってきた社会環境の違いを反映したものかもしれない。このような視点に立つなら、2つの集団を青年前期／後期と呼ぶのは不適切であり、新世代／旧世代と呼ぶべきである。

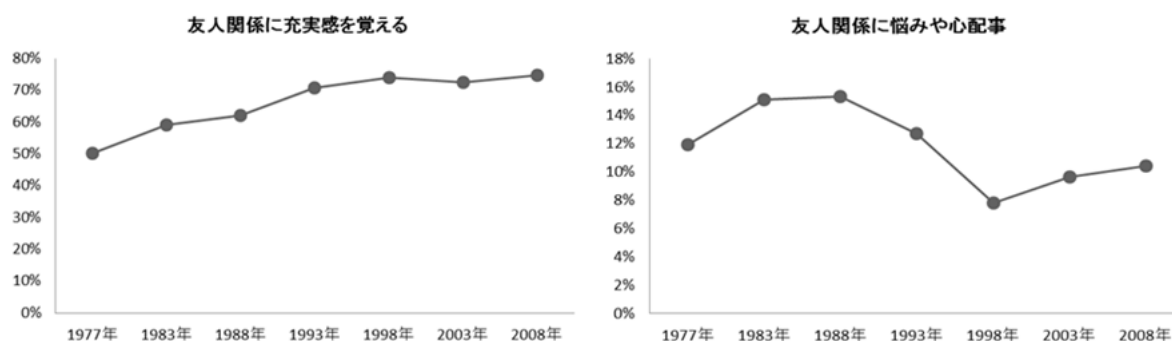
本調査の分析で2つに分けた集団間に見られる差異が、はたして加齢効果によるものなのか、あるいは世代効果によるものなのかは、本調査の結果だけから判断することはできない。過去の調査結果との比較がそこでは必要となる。ところが、本レポートの冒頭でも触れたように、前回までの調査と今回の調査とでは、データの収集方法が大きく異なっているため、両者を単純に比較することはできない。しかし、それでは話が先に進まないので、厳密に言えば統計学的に難があるのを承知の上で、なんとか近似値で比較できるような工夫を考えてみたい。

3．社会の流動化と友人関係

すでに触れたように、友人関係の満足感と安心感を尋ねる項目を設けたのは今回の調査が初めてであるが、その充実感と心配事については過去の調査でも同様の設問が設けられている。友人関係について考察するにあたって、ここまでの分析であえて後者の設問にこだわってきたのは、この点を考慮してのことである。しかし、その設問の形式は変わっており、前回の調査までは該当するか否かの2段階評価で問われていたものが、今回の調査では4段階評価での設問へと変更されている。したがって、厳密に言えば両者を比較する

ことは不可能であるが、ここでは後者を2段階に再カテゴライズすることで近似させてみたい。じつはその作業もまた、ここまでの分析ですで行なってきたところである。

では、過去の調査において、友人関係の充実感と心配事がどのような数値を示していたのかをまず振り返っておこう。その数値の変化をグラフ化して示すと下図のようになる。



そもそも両者では縦軸の目盛り幅が異なっていることに注意しておきたいが、1970年代後半以降、友人関係に充実感を覚えると回答した者が、ほぼ右肩上がりが増えてのに対し、それが悩みや心配事になっていると回答した者は、1980年代初頭から1990年代後半にかけていったん減少した後、2000年を越えて再び上昇に転じていることが分かる。

では、これらの数値と今回の結果を比較してみるとどうだろうか。すでに記したように、過去の世界青年意識調査の対象年齢は18歳～24歳だったので、それに合わせて今回の調査から同じ年齢層だけを抽出して集計し直してみると、友人関係に充実感を覚えると回答した者は約79%で、そこに悩みや心配事があると回答した者は約45%となる。前者の値がこれまでの上昇率とほぼ同じラインに乗っているのに対し、後者の値はこれまでの上昇率をはるかに凌ぐ高さとなっている。

ただし、今回からデータ収集の方法が大きく変わっているので、このまま両者を単純に比較して、時代の推移とともに心性も変化していると即断することはできない。今回がインターネットを利用した調査であることのバイアスを考えると、青年期のネット利用に関するこれまでの調査結果から類推して、従来の個別面接法よりもやや高い値が出やすいものと推測される。そこで、ここではまず友人関係の心配事に着目し、次のような手順を考えてみたい。

前回の調査が行なわれたのは2008年である。正確には2007年の11月～12月であるが、2008年に実施された国々もあり、またこの調査は過去5年おきに行なわれているので、今回の調査が2013年であることから、ここでは2008年としておきたい。そうすると、前回の調査で対象年齢となった18～24歳の年齢層は、今回の調査では23～29歳の年齢層に該当することになる。そこで、今回の調査データから該当する年齢層だけを抽出して、友人関係に心配事があると回答した者の割合を求めると約36%になる。

18～24歳における友人関係の心配事は、2013年の時点で約45%だったから、23～29歳の心配事との間に約9ポイントの開きがある。先ほどから問題となっていたのは、この差が加齢効果によるものなのか、あるいは世代効果によるものなのか、2013年のデータからだけでは判断できないということだった。もちろん現実には、加齢効果も世代効果もグラデーションをもって変化するものであり、両者のウェイトのかかり方には様々なバリエー

ションが考えられる。本来は、このようにゼロサムの的に判断すべきではない。しかし、ここでは話を分かりやすくするためにも、とりあえず単純なモデルを仮定しておきたい。

上記のグラフからも分かるように、2008年の時点で友人関係に心配事があると回答した18～24歳の割合は約10%だった。もし約9ポイントの開きが5年間の加齢にもなう効果だとするならば、2013年の時点で18～24歳が示す約45%との差である約35ポイントは、今回の調査でインターネットを利用したことによるバイアスの増加分ということになる。世代効果が見られないのなら、2013年の時点でも18～24歳の心配事は約10%のはずだからである。

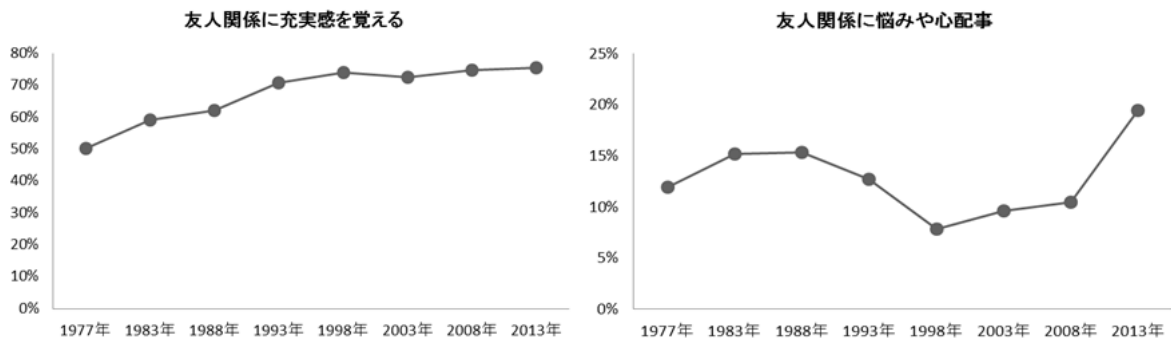
他方、もし約9ポイントの開きが5年間を隔てた世代の相違によるものだとしたら、2008年の時点で友人関係に心配事があると回答した18～24歳の割合は約10%だったから、2013年の時点でのそれは約19%になっているはずである。しかし、現実には約45%の値を示しているから、双方の差である約26ポイントが、インターネットの利用によって増えたバイアス分となる。

ここから先は、私たちの常識的な感覚や経験則によって推測するしかないが、インターネットを利用したことによるバイアス分が35ポイントというのは、やはり大きすぎるのではないだろうか。せいぜい28ポイント程度と判断したほうが妥当といえるのではないだろうか。もちろん加齢効果がまったくのゼロということはありませんから、この26ポイントという値は、現実にはもう少し高いのかもしれない。しかし、世代間に相違を生じさせる時代の空気は、新世代だけでなく旧世代にも多少は影響を与えているはずだから、その時代効果によって世代間の差異が縮まっている可能性を考慮すれば、この数字は逆にもう少し小さいのかもしれない。どちらの影響を大きく見積もるかによって、この26ポイントは上下に変動することになる。

しかし、今のところその影響の大きさを測ることは不可能であるから、ここでは便宜上26ポイントで固定しておくことにしよう。そう仮定すると、今回の調査において、18～24歳での友人関係の心配事と23～29歳でのそれとの間に見られる約9ポイントの開きは、加齢効果によるものではなく世代効果によるものといえる。だとすれば、本レポートの前半部分で分析対象を年齢で2分割した際に名づけた青年前期／後期という呼び方は不適切であり、正確には新世代／旧世代と呼ぶべきだということになる。

友人関係の充実感についても、上記と同じ手順で推計値を出しておこう。もともと数値の変動幅が小さいので、少数3桁まで使用して算出すると、2013年の時点で友人関係に充実感を覚えている18～24歳は約79.3%、23～29歳は約78.5%である。それに対して2008年の時点で充実感を覚えていた18～24歳は約74.6%である。加齢効果がないと仮定すると、データの収集にインターネットを利用したことによるバイアスは約3.9ポイントとなる。したがって、2013年の時点で充実感を覚えている18～24歳は、インターネットを利用した今回の調査結果では約79.3%だったが、もし個別面接方式で行なっていたとすれば、それは約75.4%となったはずである。前回の調査と比較して約0.8ポイントの微増である。心配事が約9ポイントの増加だったから、およそ10分の1程度の世代効果に留まっている。

ここで、友人関係に充実感を覚えると回答した者と、そこに悩みや心配事を感じると回答した者について、過去の世界青年意識調査データに今回の調査の推計値を追加し、再びグラフ化してみると次図のようになる。



では、このような世代効果は、どのような社会背景から生じているのだろうか。先ほど加齢効果を仮定したときと同じ理屈で考えるなら、友人関係の自由度が増したことによる影響といえないだろうか。新しい世代ほど友人関係が自由になってきたことの裏返しとして、そこに悩みや心配事を抱える者も増えてきたのではないだろうか。社会的な制約が減衰し、既存の枠組みにとらわれなくなれば、それだけリスクも増すからである。社会的な制度に縛られない環境に置かれているという事情は自分も友人も同じだから、自分が付きあう友人を選べる自由は、その友人から自分が選んでもらえないかもしれないリスクと常にセットにならざるをえない。

先述したように、友人関係に対する安心感と友人関係の充実感は、1%水準で有意な正の関連を示している。また友人関係の心配事は、1%水準で有意な負の関連を示している。他方、本調査には「人は信用できないと思う」か否かを聞いた設問もあるので、友人関係の充実感および心配事との関係を調べてみると、やはりどちらも1%水準で有意な関連を示している。しかし、クラメールの連関係数を使って両者の相関度を比較してみると、信用よりも安心のほうが関連性はずっと大きい。

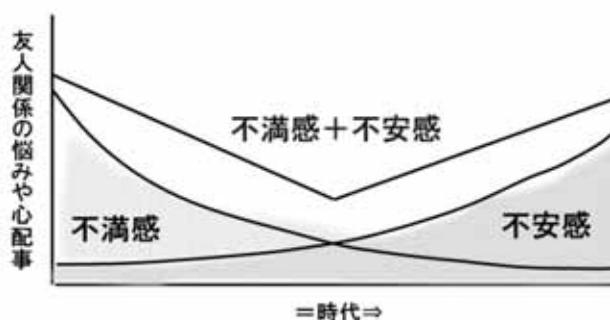
信用とは、相手の心情の中身を具体的に知らなくても、その人の言動を受け入れることである。それに対して、安心とは、相手の心情の中身を具体的に知って納得した上で、その人の言動を受け入れることである。したがって、信用が成立するためには、相手の言動をそのまま受け入れてもよいと思えるような保証が必要である。従来からその役割を担ってきたのは社会制度である。相手の言動を無条件に信じられるのは、彼の社会的地位がそれを保証してくれるからである。しかし、社会の流動化が進み、そのような制度的基盤が徐々に揺らいでくると、相手の心情をよく知って理解した上でなければ、その言動を受け入れることは難しいと感じるようになる。すなわち、信用に代わって安心を求めるようになるのである。

このように解釈するなら、友人関係に充実感を覚える青年が、時代とともに漸増してきたことについても合点がいくだろう。過去を振り返ってみると、同じ地域の住民だから、同じサークルの一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが、友人関係を支える強力な基盤となっていた。換言すれば、私たちの人間関係は、その多くが社会的な制度に強く縛られていた。学齢期の青年たちも同様で、たとえば同じ学校や同じクラスの生徒になった以上は仲間でなければならないとか、同じ部活のメンバーである以上は助けあわねばならないとか、そういった規範的な圧力が少なからず存在していた。

もちろん現在でも、人間関係を構築する最初のきっかけは、当時と大して違ってはいないだろう。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に

小さくなっている。同じクラスの生徒だからといって、自分と気の合わない相手と無理して付きあう必要などないし、同じ部活の一員だからといって、無理に助けあう必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まるなかで、そう考える青年たちが増えている。

このように人間関係の自由度が増した結果、不本意な相手との関係に縛られることが減ってきたのだから、そこに充実感を覚える者が増えてくるのも当然だろう。しかし、それは同時に不安を掻き立てるものでもある。かつてのように制度的な枠組みが関係を拘束しなくなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ自己責任の比重が高まったことも意味するからである。



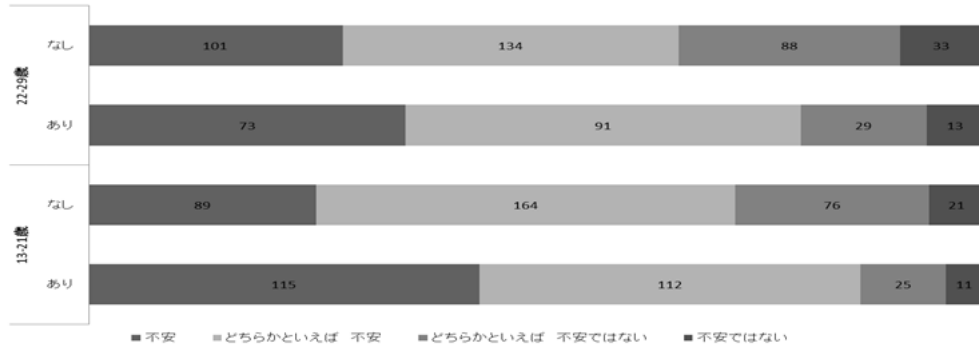
そうしてみると、友人関係の心配事が 2000 年を境にV字のカーブを描いているのも、おそらくその前後で悩みの質の主流が変わったからだといえるのではないだろうか。社会の流動化が急激に加速したのは 2000 年以降である。それ以前の社会を生きていた青年たちは、おそらく社会制度によって不本意な関係を強制されることへの不満を悩みとして比較的まだ多く抱えていたのだろう。それに対して、2000 年以降の流動化した社会を生きる青年たちは、自分が相手から選択されないかもしれない不安を強く感じるようになったのではないだろうか。もちろん両者はゼロサム的に入れ替わったわけではなく、おそらくその比重が変化したということなのだろう。そのイメージを単純化して描くと上図のようになる。

4 . 友人関係のモノサシ化

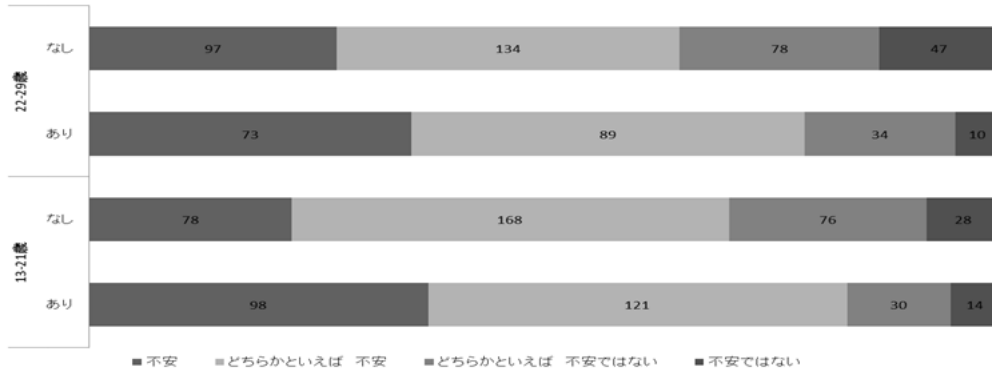
このように見てくると、今日の青年たちにとって、友人関係の問題は、人間関係とはじかに関わらない他の側面にも様々な影響を与えているものと推測される。実際、友人関係に心配事があるか否かと社会への満足度をクロスさせると、旧世代（22～29 歳）では関連を見出せないが、新世代（13～21 歳）では 1%水準で有意な負の関連が見出せる。新世代では、友人関係に問題を抱えていると社会への満足度も低くなるようである。

友人関係の問題は、将来イメージにも深刻な影響を与えている。現在の友人関係に対する心配事は、「働く先での人間関係がうまくいくか」という関係不安だけでなく、「きちんと仕事ができるか」「リストラされないか」「十分な収入が得られるか」「そもそも就職できるのか」といった不安とも、新旧世代ともにそれぞれ 1%水準で有意な正の関連を示している。しかも、クラメールの連関係数でその相関度を調べると、いずれの場合も旧世代より新世代のほうが強い関連を示している。現在の友人関係の問題が、人間関係にかぎらず、自分の将来の全般に大きな影響を与えると、若年層ほど思い込んでいるようである。

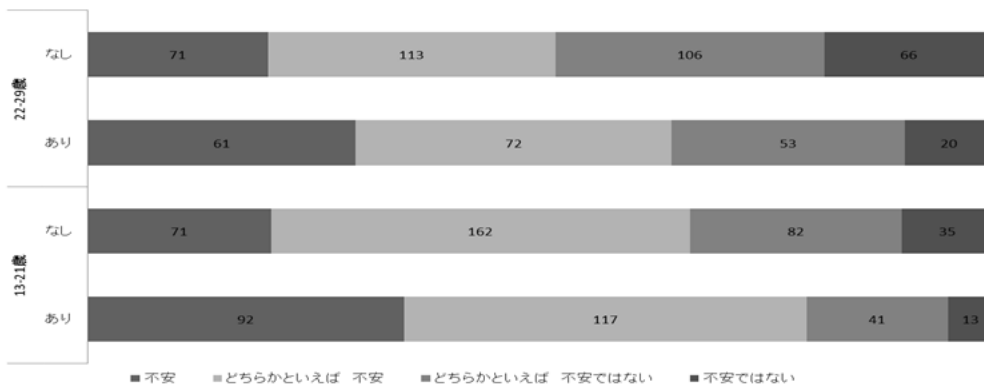
友人関係に心配事 × 働く先で人間関係がうまくいくか



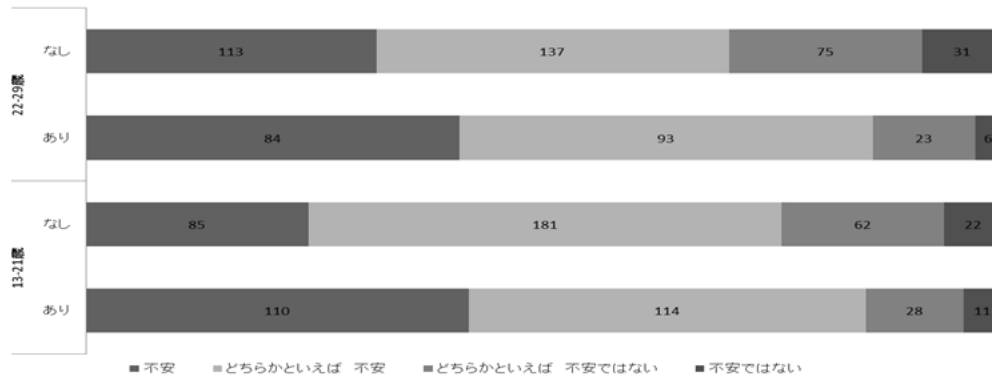
友人関係に心配事 × きちんと仕事ができるか



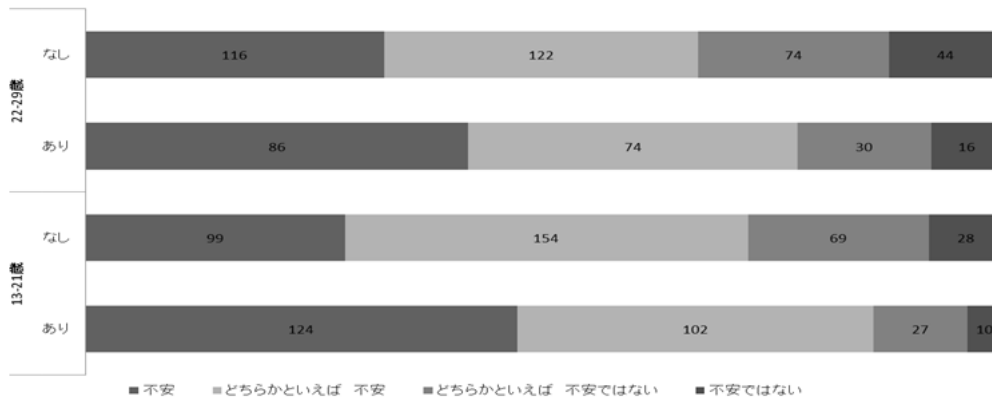
友人関係に心配事 × リストラされないか



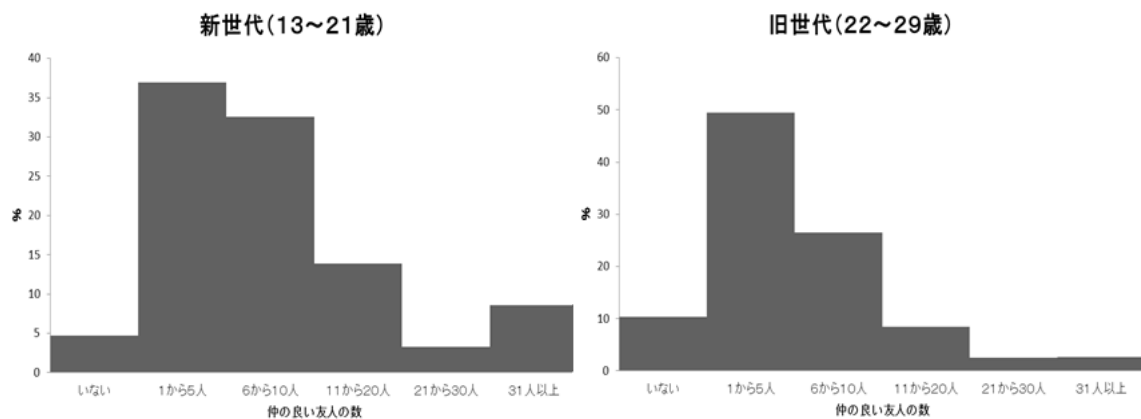
友人関係に心配事 × 十分な収入が得られるか



友人関係に心配事×そもそも就職できるのか



ところで、先述したように「仲の良い友人の数」と年齢層の間には1%水準で有意な差があり、新世代のほうが旧世代より友人数が多い傾向にある。しかし、社会の流動化にともなって人間関係の自由度が高まったことの帰結の一つとして、友人関係の問題が大きく浮上してきたのだとすれば、同じ世代の内部においても友人数の格差は広がっているはずである。経済の自由化が貧富の差を広げると同様に、関係の自由化はその差を広げるからである。そこで新旧世代の友人数の散らばりの度合いを知るために変動係数を求めてみると、旧世代のそれが0.41（平均値2.51人、標準偏差1.04人）であるのに対し、新世代のそれは0.42（平均値3.00人、標準偏差1.27人）である。新世代のほうが単に友人数が多いだけでなく、その散らばりの度合いも僅かながら大きい。学校から職場への移行という加齢効果を考えるなら、年齢層の高い集団のほうが、かえって友人数の散らばり度は大きくなりそうなものだが、現実の数字は逆の傾向を示している。新世代では、友人数の格差化がそれだけ激しく進行しているということなのだろう。



問題はそれだけではない。ひとは、他者との間にさほど差を見出せないときには、そこに評価の尺度を見出そうとしない。しかし、いったんそこに格差が生じると、それは評価のモノサシとして機能しはじめる。友人数についても例外ではなく、数の落差が歴然と目につくようになると、その数が多いか少ないかによって、人間としての価値が測られるかのような感覚が広がっていく。実際、友人数と自己評価に関わる設問との関連を見てみると、次のような関連性が見出されることが分かる。